

# 一新された明治の表紙

—木口木版とその時代—



図2 『太陽』表紙（明治31年1月～12月）  
試し摺り



図1 『国民之友』表紙（明治29年8月～明治30年8月）  
試し摺り

近代における出版文化の開花は雑誌とともにあった。博文館発行の『太陽』を例に取るなら、明治二十八（一八九五）年一月から、昭和三（一九二八）年二月まであしかけ三十四年間、通巻五三三冊にわたり、近代日本の文学・文化を根底から支えた。それをほるかに先駆けて、徳富蘇峰によって発行された民友社の『国民之友』は明治二十（一八八七）年二月創刊で、明治の知識人層を巻き込み、思想界を牽引した。明治三十一（一八九八）年八月に終刊するが、全三七二冊に上る。

明治二十年代において、時代の空気が、新進の近代国民国家らしく張りつめた真剣勝負の相を呈していたことは、じつは雑誌表紙にうかがわれる。それらを手がけたのが、前回も紹介した生巧館である。木

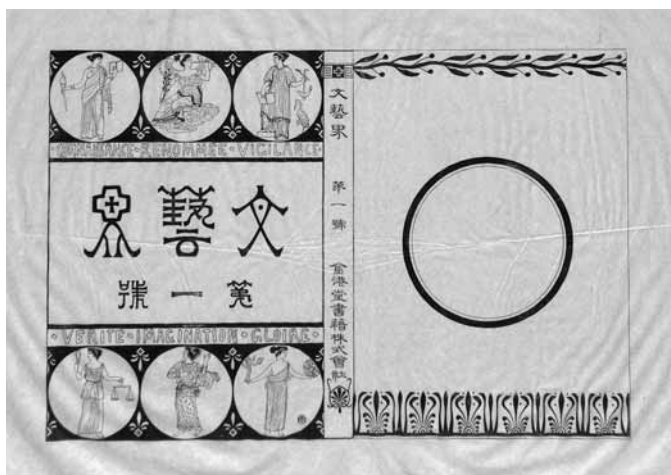


図3 『文藝界』創刊号（明治35年3月）表紙

口に精巧な図を彫り上げて木版にする木口木版を、日本に本格的に導入し、下絵作成から摺りまで一貫して行った。美術史的にも価値が高いその精緻な図版は出版界を席捲する。今回紹介する資料はその作業現場を伝える。図1ならびに図2は試し摺りであって、空きスペースに目次大要が入られるようになってきている。つまり、これらは出版物として流通させる前の工程段階にある表紙であり、非常に貴重な資料なのだ。

図1は『国民之友』の表紙である。この表紙は明治二十九（一八九六）年八月第三〇九号から明治三十年八月第三六〇号まで使われた。「生巧館刀」と刻まれているのが見える。

図2は『太陽』の表紙である。こちらは明治三十一（一八九八）年一月第四卷第一号から同年十二月第四卷第二十五号まで用いられた。下絵は佐久間文吾による（馬淵録太郎『木口木版 伝来と余談』中央公論事業出版、一九八五）。

図3は明治三十五（一九〇二）年三月に金港堂から発行された『文藝界』の創刊号表紙である。下絵は黒田清輝による。アール・ヌーボー風の図像である。生巧館の画学校の方は、黒田清輝・久米桂一郎が帰国した翌年の明治二十七（一八九四）年十月に、この二人に譲られた。木版部の方はそのまま続けられ、黒田の絵をしばしば下絵に使った。

明治二十九年には、生巧館開業者の合田清・山本芳翠と、黒田・久米が中心となって、洋画団体「白馬会」が設立されている。

金港堂というのは、明治八（一八七五）年以降、小学教科書出版をほぼ独占していた出版社であったが、明治二十一（一八八八）年に本邦初と言われる商業的純文芸誌の『都の花』を創刊するも、明治二十六（一八九三）年に同誌を廃刊し、教科書出版に戻った。しかしながら、明治三十五（一九〇二）年、一挙に『文藝界』『教育界』『少年界』『少女界』『軍事界』の金港堂五大雑誌を創刊する。

『文藝界』編集主任は国文学者の佐々醒雪で発刊の辞を記している。啓蒙的な編集方針が採られた。創刊号表紙の面ざしも、瀟洒で薫り高い。

（野網摩利子）